



アスタ・マニャーナ



別句通 〈bekkutooru〉

「翔ちゃん、連休ピーロランド行かない？」庭で孝恵は少しくずれたメイクで頭を撫でながら猫撫で声をだした。

「でもー」翔太は手にしたソフトボールを、もう片方にはめたグラブで弄びながら気の抜けた返事をした。

「あれ？行きたくないの？」孝恵は露骨に眉間にシワを寄せた。

すぐわきの家の玄関ドアが開き、長い髪をシュシュで後ろにまとめた小ざっぱりとした女性が出てくる。

「義姉さん。すいません」

「あ、冴子さん。ほら、翔ちゃんお母さんにピーロランド行こうってー」

「お義姉さん、すいません。実は私、二人目ができちゃったみたいで」

冴子は自分の腹をいとおしむ様になでた。

「え？そうなの。……おめでとう。よかったわね」孝恵は急にかしこまった。

冴子は翔太の肩に手を回し、翔太と目を合わせる。孝恵はなぜか2人から目をそらしてしまった。

「ごめんなさい。そういえば約束があった。私帰ります」孝恵は顔をこわばり気味にしつつ、ものわりのいい優等生のようにふるまった。

「あら、なんのお構いもしませんで」冴子は声のトーンが上ずり気味になった。

住宅街の路上をスマホの画面に目を泳がせて孝恵が歩いている。

「あ、しまった。忘れもの！」孝恵は冴子と翔太の家へ踵を返した。

孝恵が家に近づいていたとき、二人のしゃべり声が聞こえ立ち止まる。

「翔ちゃん、これで孝恵おばちゃんしばらく来られないでしょ。ごめんね。お母さん二人いたみたいだったでしょ」

「いいよ。別に」ボールが家の壁に跳ね返る音がした。

孝恵は泣きそうな顔を必死でこらえ、道を引き返した。暫く歩くと派手なビートの懐かしい曲のスマホの着信音が鳴る。孝恵は耳に近づけ通話を始めた。

「え？来週からの派遣はキャンセルですか？」

スマホの向こう側はビジネスライクな男の声で語る。

「加藤さんゴメン。急に先方から人手が間に合ったって連絡きちゃって」

「そんな……。1か月も待ったのに」スマホを切り孝恵はため息をつく。

土曜日の宵の繁華街はけだるさの中にも浮ついた喧騒感をまっとうしていた。仕事帰りのサラリーマン、OL風情や買い物帰りの家族連れ、若いカップル等、多くの人が行くあてもなさそうに楽しげに街を徘徊していた。一軒の立ち飲み酒場がそういった賑わいの通りに面していた。

店内は多くの酔客でにぎわっていた。孝恵が一つのテーブルの前に立ち、1皿均一料金の干か

らびた着の入った器を前にしてタバコを傾けレモンサワーのグラスに手を置いていた。

「二人目か……私はぼっち」孝恵は何か懺悔をするようにそう思った。

そのとき三十前半くらいの身持ちの良くなさそうな男二人連れの酔客が孝恵のテーブルに近づいてきた。

「お姉ちゃん、僕たちと一緒に飲もうよー」と一方の男が気安く言う。

「一人ぼっちでさみしそうにどうしたの」さらに片方の男がからんでくる。

孝恵は二人をきっとにらみつける。「うるさいわね。迷惑よ！」孝恵は何か精神の虎の尾を踏まれてしまったようにいらついた。

「なんだよ。アラフォーだと思って声かけてやったのに。つれないねー」

孝恵は手に持ったグラスのレモンサワーを二人の顔に浴びせた

「ブエー」

「ぐへっ」

大の二人の男の顔がアラフォー女の飲みかけのサワーで濡れた。ほかの客がその椿事にいっせいに振り向いた。

「二人じゃなきゃ声もかけられないくせに大きな顔しないでよ！どうせ一人じゃ何もできないんでしょ！」孝恵は堰を放流したようにまくしたてた。

すっかり夜は暮れ、大都会は一日の手仕舞い仕様へと変わっていた。深夜の駅のプラットホームは家路へ向かう多くの客でいっぱいだった。孝恵は泥酔状態で少しふらついている。駅のアナウンスが最終電車入線を告げて、孝恵は停車し電車に乗り込んだ。

電車内はけだるいムードながらほぼ満席に立ち客もいる。首尾よく座れた孝恵はまどろんでいる。

「ちくしょう、なに？」孝恵はそんな寝言を口走ったかもしれない。しかしどの客もわれ関せず、であったろう。

閑散とした郊外の駅ホームに電車が滑り込んだ。

「お客さん、終点なんですけど」天上から響くような駅員の声で孝恵は遠くにいた意識を戻された。

「やっだー！寝過ぎしちゃったじゃないー！」

孝恵は馴染みのない郊外の駅前ロータリーに降り立ち一声を上げた。

孝恵は酔いの取れない憔悴した顔でスマホの画面を見る。画面のマップには『中央都市ホテル』の表示がある。

「しょうがない。ここに泊まるか」

孝恵は薄暗い歩道をとぼとぼ歩いて目的地に向かった。

『中央都市ホテル』はその街の生き字引のような鉄筋4階建てのかなり古い小さいホテルだった。孝恵はくすんだその看板のあかりをぼんやり見上げる。孝恵「思いっきし名前負けしてるじゃん」と苦笑する。

孝恵はおずおずと入館し、狭いロビーに飛び込んだ。そして中を見渡した。

すすけて破けも見られるクロスの内装に色あせた赤い埃っぽいじゅうたん。極めつけがぼろくて小さいソファ。まるで、そういった調度の内の一つのように、カウンター内に1人の熟年の男がにこやかに立っている。

「あの一さっき携帯から予約した加藤孝恵と申しますけど」

「お待ちしておりました。こちらにサインをお願いします」彼の胸の名札には『高月信吾』の文字が控えめに並んでいる。

孝恵が備え付けのインクのきれかかったボールペンを手に取り書き始める。

「えーっと、今日の日付は……」

高月が卓上カレンダーをずんぐりした指で示しながら、「1時間前に日付が変わりまして、4日の日曜日でございます」

孝恵が宿泊カードの日付欄に『.../4』と書き込んだ。

孝恵は客室に入り室内灯をつけロックをしてベッドにどさっと倒れこんだ。

着替えもせずに仰向けになり、額に手をやる。

「あー、しんど。こりゃ明日は二日酔いきついぞ。は〜」

「あ〜、もうお酒やめる」酒を覚えてから幾度めかの呪詛の声を上げた。

孝恵はシャワーも浴びずに薄暗い室内灯をつけたまま眠り込んでしまった。

朝の訪れたホテル。孝恵はだらしなくゆうべから着のみ着ままでベッドに横たわっている。

「うーん」孝恵は目を少し開けゆっくりと半身を起こす。

「やばっ」孝恵は上着の匂いをくくん嗅ぐ。カーテンから朝日が差し込む。

窓のほうに目をやり起き上がって窓の外を見る。道路を歩く部活を急ぐであろうジャージ姿の中学生の集団を見下ろした。

孝恵「あーあ、日曜だっなのに大変ね」ベッドの上に腰掛け、両手を大きく伸びをする。

「よっく寝たなー」調度の時計を見ると9時を過ぎていた。

「あ。そういえば二日酔い全然ない。ラッキー」

額に手をやり涼しい顔の孝恵。

洗いたてでまだ乾ききっていない髪をうしろでしばった孝恵がロビーに降りてきた。高月がカウンター内ににこやかに立っていた。

「チェックアウトお願いします」

「ありがとうございました」高月の笑みに孝恵はそっけなく視線をそらす。

孝恵がカウンターに目をやると卓上カレンダーは『3日』を示している。

孝恵は日付を変え忘れたのだと思い「あの一今日は4日……」と声を上げた。

しかし高月はちょうど奥に入ってしまった。

孝恵は気にせずチェックアウトを済ませてホテルの屋外に出た。駅前通りを孝恵が気だるそうに歩いく。スーツを着たサラリーマンもちらほら駅に向かっている。孝恵の行く手にファーストフード店があった。

「お腹すいたな。そうだ。今日からのクーポン券があったっけ」財布からクーポンの紙切れを出す。

「いらっしゃいませ。ようこそ」店内に入るやマニュアルに忠実な歓待を受ける。「これひとつ。店内で」孝恵がクーポンを差し出す。

女学生くらいのバイトの店員は手に取って怪訝そうに見つめる。「お客様、すいません、これは明日からなんですけど」

「何言ってるの。よく見てよ。ちゃんと本日4日からになっているでしょ！」

「あの一。すいません。今日はまだ3日の土曜日なんですけど……」

「なんですって？」孝恵は素っ頓狂な声で応じた。

後ろの列にいた制服姿の女子高生二人組の客が邪気無く、くすくす笑った。別の男の客はいらだたしそうにした。孝恵は列から離れ大慌てでスマホを取り出し画面を見た。表示の日付は『3日土曜日』となっている。

孝恵の脳髄に『3日』と表示されていた先ほどのホテルの卓上カレンダーがフラッシュバックされた。

「そんな」孝恵はやや狼狽して店を出る。駅前通りは何気ない朝の様子だが、たしかに日曜日のそれではない。孝恵はスマホで、投宿していた『中央都市ホテル』へ電話をかけた。

「あの一さっきチェックアウトした加藤と申します。つかぬことを伺いますが……」孝恵は日付の疑問を気丈にぶつけた。

「チェックインされたのはたしかにゆうべ日付が変わってから3日でしたよ」事務的な高月の声は孝恵の混乱を増幅させるようにそう告げた。走り出す孝恵。

呆然とする孝恵。3日土曜運行の臨時列車を示す行先案内板。定期券売り場の日付表示も『3日』。駅構内のテレビ番組も毎週土曜午前中に放送している報道番組を律儀に放送していた。

「え？まるで、これは昨日に……戻っちゃったの？…う、ウッソー！」

加藤家の門扉の前に立つ孝恵。冴子は庭で花に水をやっていた。傍らにクラブをはめた翔太がいた。冴子は孝恵の訪問に気づく。

「あら、お義姉さん、いらっしゃい」冴子は愛想笑いで慇懃にあいさつをした。

「冴子さん、もしかして二人目妊娠した？」孝恵が唐突に訊いた。

「え、えっ？どうしてご存じなの？」

冴子は狐につままれたような表情した。

「女の勘よ。最近、あなた様子変わったもんね」孝恵は淡々と話す。

『“今日”そう言ったでしょ』孝恵が心の中でつぶやいた。

「翔ちゃんバイバイ～」孝恵は翔太の頭をなでて実兄の家を後にした。孝恵は道すがらスマホで電話をかけた。

「加藤孝恵です。すいません。来週からの仕事はキャンセルいたしますので」

「え？あ、あ一。ちょうど良かった……」

スマホの向こうの声は浮気がばれた夫のようにしどろもどろになった。孝恵は最後まで聞かず急いでスマホを切った。

繰り返される宵の繁華街の夕方。孝恵は件の立ち飲み酒場の前にたたずんだ。

孝恵に絡んだ二人男が当然のように酒を飲んでいた。

孝恵は男の一人と目線が合ったが、ほくそ笑んで立ち去った。

夜中、忘れ去られたかのような郊外の中央都市ホテルの前に孝恵は立ち、3日付の夕刊紙をかかえてホテルを見上げていた。

高月が何事もなくにこやかにカウンター内に立っている。孝恵が近寄った。「さっき予約した加藤ですけど」

卓上カレンダーは『3日』の表示である。

「お待ちしてました。またのご利用ありがとうございます」

「あの一、カウンターの写真撮らせていただいていたいいですか」高月は何だ？といった感じで少し面喰い「え？どうぞ」と応じた。

フレーム画像はシャッターの音とともに『3日』表示のカレンダーが移った。

「これで明日になればわかるね」孝恵は眉間を険しく寄せた。

朝になり、客室の孝恵が目を覚まし、ベッドから身をおこした。一目散にゆうべ買った夕刊紙の日付を確認する。はたして『3日』のままである。ゆうべとった写真の卓上カレンダーを確認しても『3日』。スマホの本日の日付は『4日』。テレビをつける。日曜午前中にやる番組を放送

。

「あれれ？ちゃんと日付が変わっちゃってる……。当たり前なんだけど」

孝恵がロビーに降りてきた。卓上カレンダーの日付はちゃんと『4日』だった。高月は穏やかな表情で立っている。「ご出発でしょうか？」

「あ、はい」ややどぎまぎしている。孝恵は続ける。「あ、あの一」

「なんでございましょう」高月がにこやかに応える。

「いえ。なんでもないです」

路上を歩きながら孝恵は考えた。

「ルールがあるんだ、きっと……」

夜中の電車に乗っている孝恵。中央都市ホテルの夜と朝の全景。ホテルのチェックインとアウト。カウンターの卓上カレンダーを見てくやしがる孝恵。まるで早回しの画像にくるくる変わる。

そして幾度か目の『中央都市ホテル』の客室の朝を迎えた。

孝恵がベッドの上でTVのリモコンをつけ、TV番組を見た。「や、やったー。ついに”昨日”に戻れた！」孝恵は叫んだ。

大急ぎで孝恵は自分のアパートに戻った。そしてPCの電源を入れ傍らにメモを置いて黙々とネットにつないだ。

PC画面は“スクラくじ大当たりの出やすい店情報”とある。

「しめしめ。ここだな」孝恵は画面の情報をメモした。

雑踏の午前中の繁華街に孝恵はいた。孝恵はメモを片手に周りをきょろきょろしていた。目線の照準の先に飛び込むのはスクラくじ売り場だった。

「あ、あったー！よっしゃー！」孝恵は瞳孔を目いっぱい開き、履いてるデッキシューズで歩道を蹴り飛ばして店に突進した。

スクラくじ売り場には店先に『先々週に一等出ました。当選番号...』の張り紙がマジックで大書してある。孝恵は心中、「ここだ！ヤリー！」と咆哮した。

孝恵はその晩も中央都市ホテルのセンスのない客室でベッドに横たわっていた。

「明日目覚めれば、今日になっているはず！」

孝恵はふとんに潜り込んで調子っぱずれの声で昔のヒット曲を口ずさんだ。あくる日、孝恵はビル街の雑踏を小走りしていた。

スクラくじ売り場で自分の番がめぐり来るや、開口一番、金を握りしめた孝恵は窓口に詰め寄り、「くじ！」と言い放った。

まるでDVDの早送りのように日にちが経った。孝恵のアパートの室内で、彼女は札を部屋中にばらまき仁王立ちしていた。

「一等賞！金持ちだー！」

季節がめぐり、歳月も移り変わっていた。

都心の高級マンションの広いリビングの高級ソファに髪型もたたずまいも変わっていた孝恵がくつろいでいた。傍らにはマンチカンやアビシニアといった高額な猫がかしこまっていた。孝恵のスマホの着信音が鳴り画面に目をやった。

孝恵が通話に出た。「はい。あたし。...え？だから違うでしょって言ったよね。あそこはドルじゃないと決済しないんだから！よろしくね！」ぶっきらぼうにスマホを切る孝恵。起き上がり、寝室に向かってベッドに腰をかける。

「あ、ケビン、ジュース頂戴～」孝恵はキッチンの男に言った。

男がジュースの入ったコップを二つ持ってきた。孝恵はたばこ片手にスマホを操作してネットに接続した。孝恵はスマホの画面を見て驚いた。スマホの画面『諸般の事情により、来月で閉館させていただきます。長らくのご利用感謝いたします。中央都市ホテル』

スマホを切る孝恵。

男は孝恵の曇った顔色が気になった。「How's it?」

「う、ううん。なんでもない」孝恵はソファから立ち上がり窓に近寄りブラインドを指でつまんで外をのぞいた。窓外は昼下がりの都心の光景が広がっていた。孝恵は焦りで顔が曇った。

「中央都市ホテルが廃業するなんて.....」

孝恵は左ハンドルの大型ベントを運転していた。同乗者はいない。「川田君。さっき言った額大至急用意して。支店長に直にかけあって」ハンズフリーフォンの向こうの男の声は不安げに應じる。「はい、社長。でもつぶれる郊外のビジネスホテルなんか買収してどうするんですか」

「あそこが無くなったらあんたも首なの」孝恵は苛立ちを隠さずに応じた。男の声は「え？」と反応した。

一層うらぶれた中央都市ホテルは日の入間近の傾いた陽に照らされていた。ロビーのカウンターには、やや老いの進んだ高月が仕事に勤しんでいる。

孝恵は重そうなトランクを持ち、きつい顔つきで入館する。

「いらっしやいませ加藤様」高月は馴染み客を迎えて微笑んだ。

孝恵はトランクをいきなりカウンターに無造作に置く。

「このホテル私が買う。相場も調べたの。不服なら言い値でもいいから買う。オーナーに連絡してくれない？」

「おや、ここが売られるため閉じるのをご存知でしたか。さすがですね。でもすみません。もう契約はすんだようです」

「あら、そう。いくらで売ったのかしら。私、その額に上乘せして買い戻すわ。」

「そこまでこのホテルを気に入っていただけるとは支配人冥利につきるというものです。」高月は穏やかな笑みを浮かべて孝恵をじっと見据えた。

孝恵は心の中で高慢につぶやく。「別に好き好んで泊まってたわけじゃないんだけどね」

「でもおあいにくさまですが、いくら積まれてもくつがえせないと思いますよ」

孝恵は爛漫に微笑む高月をきつとにらみつけた。

「あなたにどうしてそういえるの？とにかく買主さんの居所を教えてください！」

「しかたありませんね。買主さまはこのホテルの裏にお住まいです」

「なら話が早いわ。今いらっしゃるのかしら」

「加藤様。裏の持田さまという方は先々代、この土地をやむなく売られた後、ここにホテルをが建てられてしまい日当たりの邪魔になってしまったとのこと。なので、やっと日当たりを取り戻せてご先祖様にいいお顔ができるとおっしゃってました」

孝恵はしばらく考えこんだ。「……そう。ならしかたないわね」

高月がにっこりうなづく。

「おわかりになっていただけましたか」

孝恵はホテルを出た。彼女は振り返り、ホテル後ろ奥の旧家を確認した。

孝恵のベンツがタヤみ迫る郊外のバイパス道路を疾走する。

「社長。ちょっとお願いしたいことがあるの」

ハンズフリーフォンの先にはどすの利いた男の声が聞こえてくる。

「めずらしいじゃないですか。あなたのほうからのお誘いなんて」

「どうしてもほしい不動産があるの。ちょっと骨折ってほしいんだけど」孝恵が淡々と話す。

「ははは。ウチに相談するってことは、そちらも覚悟は決めてるんでしょうな？」

「まあね」急加速して黄色信号の交差点を直進するベンツ。

信号待ちのダンプカーが急に右折してくる。孝恵はおぞましい形相で顔がゆがむ。

「な、なんでなのよー！！」激しい衝突音。ベンツの前方が大破し停車した。孝恵は開いたエアバッグにもたれかかり頭から血を流す。

「う...うー...」孝恵はうつろな目つきで急速に意識が遠のいて行った。救急車のサイレンの音が

近づいてくる。

孝恵は車内で救命措置を受けていた。救命士の会話が続く「だいぶ頭をやられてるな。脳波も弱い」「ちょっと危ないかもしれませんね」

もうろうとする意識の底で孝恵は懸命に声を張り上げようとしていた。

「……あのホテルに連れてって……明日になれば”今朝”に戻れるから……元気な今朝の私に戻れるから……」

しかし孝恵の意識は程なく闇に包まれてしまった。

中央都市ホテルが朝日を浴びて建っていた。その一客室内に着の身着のままのスーツ姿で孝恵がベッドに横たわっている。

「う、う～ん」孝恵はうなりながら目を覚ました。

「い、痛た。は～、いったーい」孝恵は頭をかかえて天井に目をやる。

「ここは？」孝恵は首を少し上げ部屋を見渡した。昨日の事故を思い出す。

「はっ。ここはホテルだ。やった！事故前の私に戻れたんだ！」

ベッドから起き上がり窓のカーテンを開ける。

窓外の下に目をやると部活に向かうジャージ姿の中学生が歩いていた。「うー。頭がズキズキする。」

調度の時計を見ると“〇月4日9：17”となっていた。孝恵がおもむろに服装に目をやり慌てふためく。「え？あの日付、それにこの服って？」

孝恵は焦ってクローゼットのドアを開けて扉内側の鏡に全身を映した。鏡には初めてここのホテルに泊まった時の服装の自分がいた。「そ、そんな…」部屋の床に目をやると、あの時持っていた安物のバッグ。中を開いてなかみのものを引っ掻き回す。

「私のマンションのカギは？ベンツのキーはどこ？オフィスのカードキーはどこなの？」

バッグをさかさにして床に中のものをぶちまける。携帯も一番はじめにホテルに泊まった当時のものだ。いそいで手に取って電話帳を検索する。

リストには兄夫婦の番号や、派遣会社の番号など当時のものしかない。孝恵は頭をかかえてへたりこんだ。

「夢だったんだ……ね」おもむろにベッドわきのデスク上の鏡をよく見る。

額に傷跡が見える。青ざめた形相で髪をかき分け額全体を鏡に映す。

傷跡は額を大きく横切り斜めに走っていた。フラッシュバックで自分が交通事故で額から血を流す光景がよみがえった。

「こ、これは、あのときの怪我のあと……なの？」孝恵は混乱した。

突然、スマホの着信音が鳴る。画面は“加藤（兄）自宅”の表示だ。通話する。

「はい、もしもし」

快活な翔太の音がする。

「あ、おばちゃん？ねえ、こんどお父さんと3人でピューロランド行こうよ。お母さんはおばあちゃんのうちでお休みするってさ」

孝恵が額の怪我痕に手を当て慄然としたまま聞いている。

「お父さんに変わるね」

「姉さん、今度ウチの部署に来た後輩も連れて行くけど、会って見ない？アンタより2つ年下なんだけどさ。おい聞ってる？」

「聞ってる……って」孝恵は鏡に映った額の傷跡に視線を固定し呆然としたままだった。

ロビーの受付のカウンターでは高月が古びたパソコンのキーをたたいている。卓上カレンダーは『4日』を示している。ロビーにある古びた大型液晶モニターは『いつもご利用ありがとうございますー中央都市ホテル』のテロップが流れていた。了

アスタ・マニャーナ

<http://p.booklog.jp/book/75531>

著者：別句 通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75531>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75531>

*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

*本作品の2次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkccircuit.comか

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ